



コロナ禍のカオス

木村奈保子の音のまにまに | 第41号

3回目のワクチン接種を受け、「副作用」もなく、「副反応」と呼ばれるのはなぜ？
かえって、自分の年齢を感じさせた。
しかし、接種前日は、あろうことか悪夢に見舞われ、友人から届いた“抗悪夢”用（？）の塩粒を使用すると、まるで、牧師から十字架を振りかざされたパンパイアが、聖なるものに抗うように、わっわっ、と過激な反応をしまい、その後は、眠ったのか、醒れなかったのか、わけがわからない。

遠足前の夜に、逆作用の興奮をした小学生か？
ホラー映画の見過ぎによる異常体験か？

どちらもありうる話だが、やはり、コロナ禍の恐怖心と年齢を重ねた不安感、リアルに響いている気がする今日このごろ……。

さて、2年を過ぎたコロナ禍で、いったい音楽関係の仕事はどのくらい変わったのか？ 同じく、映画、演劇はどうか？
飲食店の危機状態は報道で、ある程度知ることできるが、音楽、演劇など文化、芸術のしごきに専わる人々の現状について、徹底調査する番組がないのは、残念だ。昨今は、「音楽器を吹くな」という指令も下された。

報道や情報番組は、政府によるコロナ対策の失敗が続く中、メディアは、自分たちの仕事に大きな支障がないように、平坦なニュースの扱いばかりで、特に独自のポイントを取り下げることもなく、はたまた政治家の悪い訳を聞く余裕さえ、見せる番組もある。

いったい、どこに正義があるのだろうか？
なぜ、こんなに切羽詰まった状況で、政府による“自画自賛”と“できない言い訳”が平然とあるのだろうか？
リーダーたちには、ベースとして、“ヒロイズム”があるはずだ。
その真意なしには、何も語れない。

ヒロイズムを持たないリーダーたちに、あろうことか、付度するような、情けない大人たちを、なんとなく見せられている気もする。

ああ、カオス！
CHAOSだ。

番組では、出演スタッフも、諸事情による番組の方向性が決められているのだろうが、台本通りの、議論というにも無理がある良取り志向にうんざりする。
ちなみに、私のお気に入りには、「報道特集」と「モーニングショー」くらい、制り方のウィジョンなくして、報道番組はない。
ただのお知らせ番組を目指しているのだろうか。

そういえば、2021年、オリンピック記録映画の監督を務めた河津直美監督は、自分が記録映画を撮影するところをさらに取材される劇として、テレビのドキュメント番組に協力出演した。

その内容の一部が、ネットで漏れた。
河津監督は、カンヌの受賞作などがあり、看板ありきのブランド監督。
彼女が、どんな記録映画を完成させるのかは、まだわからないが、予備編の役割を果たすテレビのドキュメントで、妙な視点で覆入れた映像があり、問題となった。それは、オリンピック反対のデモをする男性が、「実はやらせて、お金をもらっていた」と言わしめるシーンだ。

これがテーマなら、そこを徹底的に掘り下げればいいのだが、ワンカットのみで、開する取材映像は何もない。
どうしても一言だけ、入れたかったのか、それは、なぜか？

結局番組は、女性監督のプロモーション映像のような、ウィジョンのないドキュメントになっていた。その後、監督の説明は明確には、ない。
この番組では自分が被写体でしかなく、問題部分は、わからないというが女優でもない“監督”なのだから、そこを突けないわけがない。

番組で、自分のドキュメントを撮ってもらうという立場になったら、タレントや俳優は、制作側にほぼおまかせで、よほどの大物でない限り、どんなふうに乗っているのか、確認はさせてもらえないだろう。

メディアでは、大新聞、雑誌もほとんどそうで、取材されても、被写体はあとで手を入れるどころか、確認もできないのが常態だ。

私は、映画の経て取材を受ける側になると、だいたい、発行前に確認をさせてもらっている。取材者が映画のタイトルを間違えて書いたり、話した映画を見ていないため、遅くおろさず、間違いも未然に防ぐ必要がある。だから、どんな形であれ、映画という題材に私は、責任があるため、他人が書いた取材原稿もチェックを入れる。

つまり、女優やタレントとは違ひので、自分をクローズアップさせた完全な被写体になることはなく、物書きや裏方の側と同じ立場になる。

つまり、一級扱いのブランド監督が、被写体として撮影されたとしても、出演したドキュメント番組を最終確認させてもらえないということはないだろう。
女優ではなく、監督だから、自分を撮影する他者の映像がどんな視点で撮られたのか、気にならないわけがない。
映画の観客動員にも影響するはずだから。

そもそも、監督に、明確なウィジョンがないとしたら、ドキュメント映画を撮る意味もないだろう。こうした理由ひとつとっても、あやふやなまま、この問題は立ち消えした。

まさに、時代はカオス。CHAOS！

ヒトラー、ヘイトスピーチ問題にも、驚いた。
元首相の菅（眞人）氏は、弁舌巧みに国民を支配するだけの元政治家、橋本氏を形容するにヒトラーを例えて使用した件。
これは、ヘイトスピーチではないし、少なくとも“差別”とはなんの関係もない。
差別表現とは、これまで差別されてきた側の人種、性を持つ人々を排除するような発言をしたときに指張される言葉だ。

ヒトラーは、差別精神をもって、それを広げ実行した側の人間だ。
世界の人々が、ヒトラーのような人種性を生み出した過去を恐れているのは共通する認識。
恐怖政治を恐れるかゆえの危機により、例えられることはあるだろう。

また、政治家が別の政治家に対してヒトラーを形容して使用したら、“ヒトラーに例える論証”として、相手を貶めるための方法になるかもしれないが、ヘイトスピーチとは異なる。

ヘイトされる人間は、世間から虐げられた歴史を持つマイノリティーだ。
差別に敏感なアメリカ映画では、最もデリケートな基本であり、現代も、ユダヤ、黒人、女性などのマイノリティにつづく多くのマイノリティをピックアップして、主演の星につかせる物語を作っている。
これが、差別意識の（レージョンアップ）といえるだろう。

日本のメディアの話に戻そう。
MC側の出演キアラは人にもよるが、看板キアラの場合は、常に破格であり、その日のメインテーマを話す専門家、熟識者は謝礼程度。
これは、昔から疑問に思っていた問題だ。
その上、最近MCは、ゲストに対し、「OOさんは、ここまで」とか「手短に」とか上から自慢で言葉投げかける。

専門家のゲストが、日々命をかけた重要なネタを持ち出して謝礼程度で大事なデータを提供しているのに、その姿勢はどこからくるのだろうか？
時間配分や段取りを考えるのはスタッフ側（演出スタッフなど）で、それをテーブルにうまくのせるかどうかだけが、MCの腕になっている。
せめて、キヤスターとゲスト文化人の間のキアラ差は、埋めたほうがいいと思うのは私だけだろうか。

何より、テーマを裏に下げる内容はどこにあるのか？

番組制作のあり方は、常に未確認だが、まだこうしたスタイルは変わっていない。
放送局という私も長く過ごしたワンダーランドで、時代とともに、ソフトの価値が上がるはずと期待したが、薄まる方向に進行しているようだ。

一方、エンタメ人は、歌や演奏や芝居やダンス、漫才や落語ではなく、ドッキリやパンジージャンプをして、騒いでいる。
いや、これは出演者の希望ではないという、誰の目から見てもわかる。
ここを乗り越えないと、仕事が入らないという怖ろしい。

この種のキョウフと恥のリスクを芸人に押し付けて、美濃隠しいのは、制作スタッフだけではないのか？
芸の理解が浅い、裏方スタッフの悪い責難のひとつだ。

私は、お笑い芸人の芸が大好きで尊敬するが、こうしたイジメ体質のようなおふざけはまったく楽しめない。芸人本人の持つ姿を見たい。
それをサポートするためのスタッフであれ、
スタッフは、芸人の芸を高めるためのサポーターたれ！

かつて、映画の宣伝マンが競って体当たりの馬鹿なゲームをし、それに買ったら自分の担当する映画の紹介をすることができる、という企画も同じ方向にあった。
芸人やタレントに馬鹿騒ぎをさせるしか能がないスタッフがいまもいる。
優れた芸術を劇場公開する予定の映画ソフトに対して、それについてふれることを“宣伝”とみなすテレビスタッフのセンスに、おきれる。

視聴者は、歌舞伎や音楽家の演奏や映画俳優たちの姿をダイジェストでも見たい。
舞台や劇場に足を運ぶためのアプローチが欲しい。
これ以上、文化レベルを低め、芸を薄める必要はないだろう。

しゃべりのうまい芸人も、MCという自分の冠番組のキアラや本数を競い合って、権力とサクセスの証を見せつけていくという傾向があるので、そこは控えめに言うべきだ。
サクセスして、輝くのは誰でも輝むところではあるだろうが、MCをすると、多くは、芸が薄まっていく。

それでも輝いて、家族や弟子たちをカバする生活は価値があるが、こうした世の中で、文化や芸術に対する社会貢献に意識が向いたら、より、価値が上がるだろう。
ハリウッドスターたちが、するように……。

いづれにせよ、SNSでもバラエティでも、キャッチイな“言葉の力”が求められる昨今、音の力で、芸の力で、世の中を牽引する時代を見たい。

木村奈保子
作家、映画評論家、映像制作者、映画音楽コンサートプロデューサー
NAHOK/パッケージデザイナー、ヒーローインターナショナル株式会社代表取締役
www.kimuranahoko.com

NAHOK Information



木村奈保子さんがプロデュースする“NAHOK”は、欧州製特殊ファブリックによる「防水」「温度調整」「衝撃吸収」機能の楽器ケースで、世界第一線の演奏家から愛好家まで広く愛用されています。
Made in Japan / Fabric from Germany
問合せ&詳細はNAHOK公式サイトへ

PRODUCTS

クラリネットバッグ【Camarade/wf】
通常のクラリネットハードケースサイズ＝18cm×36cm×7.5cm（ベル部分10.5cm）がジャストサイズで入ります。ハードケースの凸部分をガードしながらストレートな直線形状にした、絶妙なサイズ感で、ハンドル2本立てのバッグ式です。カラーは「フューシャビク/リボン」と「アイボリー/チョココリン」の7カラー。



>>BACK NUMBER
第34回：時代と闘い、ストリートから世界へ
第35回：コロナ禍の2020東京オリンピック、チャップリンとレニ・リュウフェンシュユールと
第36回：東事とジェンダーギャップ
第37回：スウィッチな女のロマン
第38回：スピーチという名のエンタテイメント
第39回：逃げずに、向き合う“リスペクト関係”とは？
第40回：社会を反映するエンタテイメント

＜前の記事＞
社会を反映するエンタテイメント

＜録音記事＞
平昌オリンピックと音楽 | 木村奈保子の音のまにまに | 第1号
アカデミー賞2019年は、マイノリティーの人権運動と音楽(ワウ) | 木村奈保子の音のまにまに | 第6号
MeTooの土壌、日本では？ | 木村奈保子の音のまにまに | 第2号
津軽のカマリ、名匠高橋竹山の物語 | 木村奈保子の音のまにまに | 第4号
女性の告発に、なぜ目をつぶるのか | 木村奈保子の音のまにまに | 第9号
エリック・クラプトン・サウンドとからむ生きざまの物語～木村奈保子の音のまにまに | 第3号
ヒロイックな女たち | 木村奈保子の音のまにまに | 第5号
母と娘 | 木村奈保子の音のまにまに | 第12号



The Clarinet | ザ・クラリネット 最新74号
The Clarinet | バックナンバー
The Clarinet CUI加入者・更新はこちら
クラリネット楽譜一覧

ENTRY 投稿・応募
アンケート一覧へ



HOT VIEW
今話題の人気記事
木村奈保子の音のまにまに

コロナ禍のカオス

楽譜特価目録 2022

星塚練習

ザ・ナルマン・クラリネット・アンサンブルが伝授 やれば絶対につまくなる基礎練習

社会を反映するエンタテイメント

逃げずに、向き合う“リスペクト関係”とは？

星塚練習

ザ・ナルマン・クラリネット・アンサンブルが伝授 やれば絶対につまくなる基礎練習

星塚練習

ザ・ナルマン・クラリネット・アンサンブルが伝授 やれば絶対につまくなる基礎練習

スビーという名のエンタテイメント

Yany SIXS+亀原優希【試奏動画あり】

星塚練習

ザ・ナルマン・クラリネット・アンサンブルが伝授 やれば絶対につまくなる基礎練習



The Clarinet ザ・クラリネット
約10月号

【クラファン終了まであと1日】
学生協賛プロジェクト「東京クラリネットフェスティバル」
コロナによって実施運動が思うようにできなかった学生さんたちのモチベーションを上げるきっかけを握りたい。…もつと見る

東京クラリネットフェスティバル
開催＆学生協賛プロジェクト

